話題　其の３１：“ラマダンの体験はタマラン？”

間もなく今年のラマダンも終わりを迎えようとしています。
私の人生では、もう体験できないかも知れないので“たまらない体験”（もうタマラン事）をここに記録として残しましょう。

聖なる月間：ラマダン中は『争わず、憎しみ合わず、怒らず・・・』とは、彼等からの説明。
「呑まず、食わず、吸わず」ヘビースモーカーの多い私の職場で、言い争う声が聞こえるのは何故？
朝の４時半から夕方の４時半くらいまで約１２時間、平静を保っている人に拍手。（あんたはエライ）

ストレス：夕方４時４０分、日の入りを告げる詠唱がモスクから流れる頃、イスラムの人達は一斉に食事をはじめる。５時前、まだこの時間は家路を急ぐ暴走車両を時折見かける。交通量がぐっと減った道路を、信号待ちももどかしそうで、タイヤを鳴らして急発進、急ハンドル、急ブレーキ・・・。
多分、運転手自身もそれを眉をひそめて見ている人達も、かなりのストレスを感じているはずだ。

貸し切り：それが５時半になる頃には、道路もスーパーマーケットも貸し切り状態になる。
いつもこの状態だったらゆっくり買い物が出来るのに・・・。と思えるのも１時間程度、どうしたことか夕食を終えた人達でスーパーのレジに列が出来ている。なんで？
という事で、日頃は職場帰りの買い物が、この時期限定で５時１５分に家を出て、６時には帰宅する。
これが、私にとって『争わず、憎しみ合わず、怒らず・・・』というラマダンの過ごし方だ。

浮く：今回のラマダン期間中に３回のおもてなしを受けた。“必ず”と言っていいほど客は１０人くらい招待されている。夕食が済むと甘い紅茶、お菓子、最後にコーヒーとアーモンド等の豆類が出る。その間約２時間から３時間、皆さん方はアラビア語で話題が尽きない。時折退屈している私に気が付いて英語で話しかける人もいるが、それも含めて私の存在が浮いてしまう。
単身赴任で料理下手な私にとって、たまのご馳走に感謝しつつも「来ても良かったの？」と思える。

いじめ：「それを食ったら止めよう・・。」と思ってもつい手が出てしまうアラビア料理。
でも気をつけないと、満腹になった頃に招待してくれたホスト自ら手づかみにした羊の肉が遠慮なく自分の皿に盛られてしまう。「もう結構、充分です」と言うと『嫌いなのか、まずいのか？』と聞かれる。『いえとても美味しいですよ。大好きです』胃袋の限界を超えた頃「これっていじめだ」と思った。１０人で、これほど食っても、大きな皿に盛りつけられたマンサフ（料理の名前）は半分も残っている。（本当に貧しい人の事を考えて断食している人は、お祭り化した現状を嘆いているのですよ）

胃の調子：『ラマダン中の断食は年に１度、胃の中を空っぽにして、クリーニングする様なものだから、健康のためにもいいんだよ』かなりの人が同じよう言う。
「夕方食い溜めしなければね」と私は言いたい。

サラリーマン：昔イスラムが生まれた時代に、この地域に暮らしていた人達は、遊牧民（ベドイン）や交易に携わる人達が多かった事だろう。“自由業”の人にとっての断食は「恵まれず、食うことに困っている人達の苦しみに身をもって体験し“施し”をする」為の断食を行う余裕が有ったと思われる。
しかし、時代は職業の範囲を多様に拡大した。**イスラムのサラリーマン達よ頑張れ！**

私のラマダンは、遂に我慢できずに、こっそり隠れるようにコーヒーを飲み、寒いのに窓を開け広げてたばこを吸う日々でした。幸いにも、クリスチャンの同僚が居るので“二人で団結”みたいな友情が芽生えています。それも明日１日で終わります。嬉しいような惜しい様な・・・。

隣の国では“国連のイラク査察”で『中東の火薬庫』にいつ火がつくのか？
火付け役（アメリカ）は間近に迫ってきています。油断できない状況です。
この状況下で、ラマダン中のイスラムの人達は、争わず、憎しみ合わず、怒らずに聖なる月を過ごせたのでしょうか？

理解しがたい国際情勢や“異文化を味わう”事が海外生活でも大きな楽しみと苦しみです。
その中で自分を見つめ、満足感や無力感を素直に認めています。

****

執筆及び編集：久米　篤憲